

歓喜よ、美しき神々の煌めきよ 人間性の力強いシンボル

シラーは、1786年に発表されたその詩で、エリュシオンにおける「天上の歓び」を讃えた。ギリシャ神話で「神々に愛された人々が死後に住む楽園の島」とされているのがエリュシオンである。捕虜たちにとって四国島の板東は、そのような理想郷ではなかっただろう。いや、そうとも言い切れまいか。第一次世界大戦中の決して平穏ではなかった時代においては、それでも比較的平和な場所であったに違いない。その点についてはこの後、板東が位置する鳴門市の亀井俊明元市長から詳細を伺えることだろう。我々にとって大事なことは、今から約100年前の1918年6月1日にこの地で、東アジアにおいて初めて、ベートーヴェン第九交響曲、その中でも特に有名な第四楽章が、板東収容所のドイツ人捕虜たちの合唱団とオーケストラによって演奏されたということが、決して伝説ではなく、歴史的に確かな事実であるという点だ。

かの第四楽章は、「歓喜によせた歌」であるのみならず、「友情を讃える歌」でもあるのだ。

ひとりの友人を得るといふ
大きな賭けに成功した者よ、
ひとりの優しい妻を努めて得た者よ、
その歓びの声をひとつに混ぜよ！

そう、この地球上でひとつの心と
呼ばれる者も！
そして、それが出来なかった者は、
この集まりから涙を流してひっそりと去る。

(出典：関西シティフィルハーモニー交響楽団)

私が本日代表してお話するドイツ全国の独日協会は、シラーが火をつけ、ベートーヴェンがその調べに載せて世界中へ届けた激しく燃え上がる炎を保ち続けている。各協会が、日本との友好関係の維持と発展に努めている。我々のメッセージは、非常にストレートである。日本は友を求め、ドイツもまた友を求めている。地理上は遠く離れているにもかかわらず、我々の間には緊密な絆が存在する。これまで150年以上にわたり、関係を築いてきたのである。活発な交流を相互に大切にしている。各独日協会において、双方が常にあともう一步理解を深められるよう、お互いのことを学んでいこうという努力が為されている。

音楽はその取り組みにおいて非常に役立つツールである。音楽は、その独特の文法と語彙をもって人々の心を開く。双方の言葉を理解しなくとも、語彙が足りなくとも、音楽を通して気持ちを通じ合わせることができるのだ。芸術は翼を持つ。芸術は、国境や隔たりを、いとも軽やかに乗り越えていく。

今日では簡単に口をついて出る音楽も、当初はそう容易なことではなかった。意思疎通のために、音楽という橋を架けていくために、日本の友人たちは多大なる努力を重ねたのだ。その進め方といえば、今日の我々が目を見張るものであった。250年もの間ほぼ完全に鎖国状態を維持しながら、日本は19世紀中ごろまで独自の、ヨーロッパの人々の耳には理解し難い、音楽の伝統を持っていた。

西欧諸国は初め、非凡な作曲家、名高い指揮者、そして偉大なオーケストラを引き連れて、日本を訪れたわけではなかった。最初の出会いは厳めしい行進曲の歩調を伴うものであった。軍人が陽気なメッセージを携えることなど稀であるが、この時も例外ではなかった。1853年、米国の

Verband
Deutsch-Japanischer
Gesellschaften
Graf-Adolf-Str 49
40210 Düsseldorf

Fon: 0211 / 390 26 74
Fax: 0211 / 994 59 212
Mail: Vorstand@vdjg.de

www.vdjg.de

Vorstand

Dr. Ruprecht Vondran
(Präsident)
Mail: Vondran@vdjg.de

Erhard Reiber
(Vizepräsident; Finanzen)
DJG-Berlin
Mail: Reiber@vdjg.de

Roy Richter
(Vizepräsident; Presse und
Kommunikation)
DJG-Leipzig
Mail: Richter@vdjg.de

Julia Münch
(Jugend)
DJW, Studienwerk
Mail: Muench@vdjg.de

Markus Scharrer
(Internet und
Informationstechnik)
DJJG
Mail: Scharrer@vdjg.de

Geschäftsführung

Rie Suzuki-Fastabend
Mail: Geschaeftsstelle@vdjg.de

Bankverbindung:
Commerzbank, Düsseldorf
BLZ: 300 400 00
Kto.-Nr.: 808 828 800
IBAN: DE22 3004 0000
0808 8288 00
BIC: COBADEFFXXX



ペリー提督が黒船を率いて日本列島へと来航した。江戸へ大砲を向け、威圧したのであった。最悪の事態は免れたが、日本は大幅な譲歩を余儀なくされた。軍楽隊のリズムにあわせ、ペリー提督は護衛たちとともに軍艦から降りてきた。当時は招かざる客であった、英国、フランス、ロシアといった他国の派遣使節も、米国に続いた。オイレンブルク伯爵が率いるプロイセン使節団を含む各国の使節団が、煌びやかな軍服に身を包んだ軍楽隊を同行させていた。信頼構築のための方策だったのだろうか？全く新しいリズム、メロディー、楽器に、日本人は驚きを隠せなかった。

行進曲が静かな調子であることなどまずない。静寂な調べは、追悼の折に奏でられるばかりである。後に江戸幕府の終焉をもたらした、天皇への政権返上を実現させた明治維新の旗手たちは、この高らかに鳴り響く音の源でもある軍事的有用性を即座に理解した。隊列に対し作戦号令を出すうえで、ドラムとトランペットが果たす役割の重要性を見抜いたのが最初であったと記録されている。

当初は逡巡の色を見せていたものの、日本は西洋音楽の文化的価値を認め、次第に門戸を開くようになっていった。以下に示す受容の歴史は、まさに日本人の特徴を説明するものである。高い共感能力、覚悟、馴染みのないものを仔細に徹底的に究明する能力、異国のものを取り込み自らのものにする能力、長期的視点、大量のエネルギーと資本の投入。文化歴史学者たちがこのプロセスを丁寧に描写している。

高い身分の人々がまず、シグナルを発した。徳川将軍、更には天皇が、新たな音楽に対する関心を示したのだ。外国からの使節を迎えるにあたり、そして国家的な祝祭日やその他の公式行事の際に、西洋音楽が演奏されることとなったのだ。西洋音楽の導入は、上意下達により進められた。日本はその他の方向性の決定においても、そして今日に至るまで、このようなやり方を取ってきた。

介入が最も容易な分野、すなわち軍隊から実行に移された。当初は多方面へ打診がなされた。幕府はフランスの軍事教官に助言を求めた。フランス陸軍による最初の指導は、フランス風の信号ラッパ楽団という成果となって現れた。それに対して薩摩藩は、そして後に海軍も、英国式システムを取り入れ、ここではトランペットによる演奏が重要な位置を占めた。明治維新後、新政府は軍隊の編成を行ったが、陸軍、海軍ともこの伝統を引き継いだ。それまで操練や出兵時に使用されてきた法螺貝や銅鑼は時代遅れとなった。このような新しい音楽の習得と演奏に対する軍楽隊の努力は、日本の歴史において極めて重要な意味を持ったという点で、歴史家の見解は一致している。

しかし当初は、何もかもが不足していた。音楽家はほとんどおらず、音楽教師は数えるほどであり、楽譜は足りず、楽器もなかったのだ。この状態を解決すべく、日本政府は 1879 年、広範に影響を及ぼす決定を下した。音楽教育の研究ならびに教員の養成を所管する役所「音楽取調掛」を設置したのだ。日本全国における新たな音楽文化の普及のための礎を、とりわけ音楽教育の土台を築くことが期待された。このような官僚による支援をもって新たな取り組みを促進するという考え方もまた、新興産業の育成に至るまで、後々、多くの分野において見られるようになる。

音楽当局が、どれほど詳細にわたり方向性を定めたかについては、田中不二麿が当時帝国大学で行った講演の原稿から窺い知ることができる。田中は、新たな政治体制の設計への示唆を得ることを目的として 1871 年～73 年にかけて欧米を視察した公家岩倉具視率いる岩倉使節団の一員であった。一行は、憲法制定にまつわる課題のみならず、法秩序や自治体制度の在り方に始まり、病院、下水システム、刑務所、兵器システム、軍隊組織に至るまで、近代国家を完成させるために必要となる、あらゆるものを見て回った。後に明治政府の閣僚となる田中は文化的な制度、たとえば学校、教員養成所、教育カリキュラム、音楽教本などを中心に視察した。どのように些末なことであっても、田中にとっては重要なのであった。田中は講演で、視察を通して得られた知見を基に歌を歌うことは体に良く、肺を鍛え、健康を促進し、意志の力を強化し、病を予



防するという説を披露した。加えて、音楽は人々が、知力をつけ、気分を一新し、物事を深く理解し、品性と知性を高めるうえでも役立つと述べている。

文部省ならびに同省に設置された音楽教育機関は、このような観点から指導カリキュラムの策定に影響を及ぼしたのであった。民族音楽は、人々が楽しむためだけにあるのではない。音楽の道徳的な性質は、国民に多大な影響を与えるとされている。だからこそ、たとえ美しいメロディーを持つ音楽作品であっても、歌詞が検証されねばならなかった。非道徳的な詞は削られ、必要とあらば、新たに書き換えられることになった。

次のステップも辻褄があっている。早い時点で、革新への道を示す準備ができていたのは海外からの専門家たちであった。熟慮の段階においても、断行の段階においても、決して少なくない数の外国人専門家が招聘された。1871年～1877年までお雇い教師として奉職したアイルランド人のジョン・ウィリアム・フェントン(John William Fenton)、その後任として1879年に起用され、その後20年もの任期を全うしたドイツ人、フランツ・エッケルト(Franz Eckert)の両名が、日本に西洋音楽を紹介するうえでも多大なる貢献を果たした。

いずれも、理論と実践の両面から、日本で西洋音楽が発展していくための重要な礎を築いた。そのことに異論の余地はない。しかしながら、日本の伝統的な宮廷音楽である雅楽に注意が払われることは残念ながらなかった。両名とも、今日に至るまで目にするのできる、西洋音楽の支配的地位を築き上げたのだ。そのことについては、当時の日本においても批判がなされている。とりわけ、造形美術の分野は全く様相が異なっていた。この分野では、米国人フェノロサが(Ernest Fenollosa)、西洋美術の紹介という、変革への課題を仰せつかった。フェノロサもまた、西洋の知識を日本にもたらすことが期待されていた。日本の芸術界の近代化において本質的なものをもたらしたのは、フェノロサであった。フェノロサはしかし同時に、当該分野の責任者や関係者に対し、身近に存在する自国の文化遺産に目を向けるよう促した。日本で今なお多くの文化財が保護されているのは、フェノロサのおかげである。

この関連から、日本の国歌「君が代」が制定された当時の話が意味を持つ。ドイツでは時折、君が代を作曲したのは、先に紹介したシュレジエン出身のフランツ・エッケルトであると耳にする。これは正確ではなく、少なくとも、真実の一部を語っているに過ぎない。今日では、エッケルトの前任者であるウィリアム・フェントンが1870年に最初に草案したというのが通説となっている。しかしその草案は多分にヨーロッパ風であったことから、日本側責任者の異論なき賛同を得ることができなかった。そこで政府は国歌制定のための委員会を設立し、フランツ・エッケルトも委員として名を連ねた。その結果、歌詞の原案はそのままに、雅楽風のメロディーがつけられることになったのである。作曲は、雅楽奏者の林廣守であった。今日では、エッケルトが和声を付し、編曲を行ったと理解されている。このようにして完成した、君が代が、今もなお演奏され、唱歌されているのだ。

音楽をはじめとする異国の教育文化遺産を取り入れることに日本がいかにか真剣だったかは、長期にわたるその取り組みが示している。先述の岩倉使節団は、高貴な家柄の7歳から14歳までの5人の少女を視察旅行に同行させた。この女子留学生たちは、10年余りの歳月をかけ、最高の教育を受け、得た教養を祖国に持ち帰ることが期待されていた。故郷と両親との長きにわたる別離に耐えることのできなかつた少女もいた。女子留学生の1人であった永井繁子は、特に幸運に恵まれた。繁子は、駐米外交官の采配により、ニューイングランドに住む非常に高い教育水準の家庭に預けられた。高校卒業後、大学で音楽を専攻し、日本からの帰国命令に従い祖国へ戻った。帰国直後は元の生活に慣れるまで時間がかかった。なにしろ日本語がかろうじて理解できるレベルになっていたのだ。繁子は、高級海軍士官と結婚する。この時から、瓜生繁と名乗り、その名で今でも知られている。繁子は初め、音楽教育機関である音楽取調掛において、ピアノ教師として後輩の指導にあたった。同機関で大いなる功績を上げたアメリカ人音楽教師ルーサー・ホワイティング・メーソン(Luther Whiting Mason)の任を引き継ぎ、西洋音楽の団体である



「洋楽協会」での演奏会に出演し、ピアニストとしてリサイタルを開催した。これもまた文化統合の顕著な成功事例である。

以上、不完全な足運びながらも、音楽史をたどる短い散歩からは、次のことが明白となっている。日本人は、西洋音楽を学び、自らのものとするに、並々ならぬ努力を重ね、この上ない成功を収めた。西洋音楽の裾野の広さと、今日のトップクラスの演奏に目をやれば、日本は音楽先進国の一員に相成ったと言えよう。

しかし、そのような評価によって、視線を逸らされてはならない。音楽とは、一国にとどまるものでもなく、一大陸に属するものでもないのだ。音楽は人類共通の言語である。このような観点から、我々は本日、音楽を愛するゲストを迎えられることを大変喜ばしく思う。日本の友人たちが、ベートーヴェン第九の「里帰り公演」を披露してくれるという。「里帰り」には二つの意味が込められている。ひとつのクラシック音楽作品が、世界旅行を経て故郷に帰ってくるということ。同時に、数百万人もの犠牲者を出した凄惨な世界大戦を経て、人々が無傷で故郷に帰還したという史実を思い起こさせる。本日の演奏会は友から友への贈り物であり、非常に良い意味で、人間性のシンボルだと言えよう。

ルプレヒト・フォン・ドラン